

## 福祉ボランティア体験記 ～コミュニケーションについて

書道のボランティアをしていて感じるのは、「三つ子の魂百まで」ということわざです。

利用者さんのほとんどが「認知症」を抱えておられるのですが、書道を通じて対話をしていると「ほかの人に負けたくない」「もっとうまく書きたい」という、強い向上心を持っておられることが分かってきました。この「向上心」は私が幼いころ書道教室で思っていたことと違いはありません。なので、みなさん「自分の美文字筆」を持っての参加がとても多いです。

年齢層もとても高く（明治）大正生まれがほとんどです。平均年齢は軽く 80 歳以上です。

その中の最高齢の方は百歳をこえている女性。N さん（仮名）

ボランティアをさせていただくに当たって、現場を見学させていただいたとき、N さんが「写経」をしておられました。スタッフの方が「この人はこれ（写経らしい・・・）さえあればしますから」と言われ、少々私は戸惑いました。

ボランティアとして施設に伺うようになって気づいたのですが、N さんはスタッフがいないときは、周囲の方と静かに談笑しておられるのです。あくまでもこっそり。

「老いては子に従え」ともいいますが、施設の方の言うとおりに、「黙って」しているほうが良い。そう考えておられるのかもしれないな・・・と感じました。

しかし言い換えれば「感情を出さず（喜怒哀楽）ためること」は心理学的にみてもあまりよくはないのです。お話を N さんともしたいと思い、「写経」は最後にまわして、ほかの皆さんと同じお手本を使っていただくようにしました。そして、「書きやすい」ように、椅子のクッションの高さなど、さりげなく最小限ですが控えめに、こちらから話しかけるようにしました。

初めは「アイコンタクト」だった N さんも、最近になってですが、お話することも出てきました。顔の表情も最初にお目にかかったときより、豊かになってこられました。

こういう嬉しい変化を目にするのもあれば、残念ながら症状の進行がみられる方も事実です。

幸い、書道は「季節の習字」があります。「日本の四季や行事を表すお手本を使うこと」で、季節の変化を実感していただき、少しでも症状の軽減につながればいいなと思って選んでいます。

また、お若い方で、初めて参加された方が、おられました。最近の事です。A さん（仮名）。

書道歴があるとのことで、皆さんと同じようにお手本を出しました。しかし、苦手な文字が多いお手本が一枚あって、どうしても書けないご様子でした。

注視しておりますと、「こんなん書けますかいな！わたしははじめてやで！これは四文字とは違う。こんなお手本かけるわけない！」

どんどんテンションがあがってこられたので「みなさん、長くおけいこされているので、書き応えのあるお手本をこの頃は好まれるのです。やはり平等でなければいけないので出したのですが、他のお手本もあるので出しましょうね。これはどうでしょう？」

「ごめんな、はじめてやのに、いろいろ言うて。このお手本気に入ったわ。ありがとう」しきりにそういわれ、また、習字に没頭していかれました。

この二つの体験から、これからは「世代別」のコミュニケーションが必要だと痛感しました。

これから先の近未来の利用者は、生まれた年でいうと「昭和ひとけた（一桁）世代」「団塊の世代」と、いうようにシフトしていくと思われます。

●「昭和ひとけた世代（昭和一桁から十年代）」は、戦後、高度成長期を支えた世代です。

誇り高い方が多いですが、その反面、定年でリタイアしたり、老化に直面したりすると「自分は価値のない人間だ」と落ち込む傾向がある。

●「団塊の世代（昭和20年代前半）」は人数も多く、長年企業人として日本を牽引してきた人たちです。

「とにかく良い暮らし。子供には、良い学校、良い職場、良い伴侶、老後は子供と二世帯住宅で暮らしたい」人生の目標はこのように極めて明確です。しかし、少しでも競争に負けると、「ダメ人間」と自分を責めて落ち込んでしまうことが多い傾向がある。

どちらにも共通していえるのは「自分の考え、セオリー」をしっかり持っている。いわゆる「自己主張」をはっきり表にだす、ということです。

現在私がボランティアをしている施設はこの二つの世代は極端に少ないです。

大正時代の方が多いので、若輩の私のつたない指導も、まあ、よし、とおおめに見てもらえている。

しかし、Aさんのように、自己主張をはっきりだされる（たぶんAさんは昭和の初めだと思われる）方も増えていくのではないのでしょうか。

いわゆる「今までのセオリー」が通用しない時代。

コミュニケーションの対策としては

●「(利用者) ひとりひとり、を大切にする」

●「奉仕の精神を持つ」この根本は変わらない

と思いますが、これまで以上に「介護の質」が厳しく問われていくのもそう遠くないと実感しています。